

# 「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◇◆◇ No.0576 ◇◆◇

20/03/18

## 【ここから先は「ドル高 or ドル安」、果たしてどっち!?】

新型コロナウイルスの影響を受け、金融市場全般が大荒れた。たとえば、NYダウは12日に「史上最大の下げ幅」を記録。その舌の根も乾かぬ翌13日に今度は一転し「史上最大の上げ幅」を示現するなど、値動きが目まぐるしく変化している(\*注:「史上最大の下げ幅」は16日に再び更新)。また、仮想通貨(暗号資産)の乱高下も激しく、代表格であるビットコインが、わずか一日で5割もの暴落をたどったことは、鮮烈な記憶として残っている。

そうした金融市場と比較すれば、まだ「幾分おとなしい」ものの、為替市場も非常に荒っぽい値動き。とくに、過去3年小動きが続いていたドル/円は、そんな鬱憤を晴らすかのような非常にアクティブな動きをたどっている。ただ、問題となるのはここからだ。ドルはさらなる戻り歩調をたどるのか、それとも再び下値を試すのか、それぞれの視点から以下で論拠を指摘してみたい。読者の皆さまは、いったい「どちらの見方」に与するのだろうか!?

### << 「ドル安・円高」派 >>

本題に入る前に、年初来ここまでのドル/円相場を見ると、安値は101.19円、高値は112.22円で、変動幅は11.03円、変動率は10.2%を記録している。昨年の年間変動幅が8.30円、変動率が7.6%にとどまるなど、小動きだった過去2年の「年間変動率」および「年間変動幅」を早くも上回っている計算だ。

ともかく、ここまで過去の鬱積を吹き飛ばすような変動と言ってよいが、当然まだ過去の年間平均変動にも届いていない。

ちなみに、以前から当レターにおいて幾度となく取り上げてきたように、ドル/円の平均年間変動幅はおよそ18円で、同変動率は16%。そんな過去の平均変動率と変動幅を今年は達成すると仮定しただけでも、ドル/円は年内に100円を割り込み95円レベルまで到達する可能性を否定出来ないことになる。

また、先週などもレポートしたように、今年の年初、筆者は年間見通しとして「ドルはやや強気」あるいは「中立」を予想した。前者はともかく、後者のケースでも実は理論上、1ドル=100円以下となることはありうる。これが仮に筆者の相場観が大ハズレで、「ドルはやや弱気」などであった場合、当然さらなる下値をたどる公算が大きいだろう。1月15日付のレターから、当該部分のデータのみを再掲載しておく。

(3); 「ドル弱気相場」; ドル高方向に5%、ドル安方向に11% ー ドル高値114.08円、ドル安値96.70円

(4); 「ドル最弱相場」; ドル高方向に2%、ドル安方向に15% ー ドル高値110.82円、ドル安値92.35円

(5); 「ドル中立相場」; ドル高方向に8%、ドル安方向に8% ー ドル高値117.34円、ドル安値99.96円

いずれにしても、ドル/円の下値リスクはまだ残存している可能性も否定できず、再びドル安が進展する展開には要注意だ。そもそも論として、これも以前に何度かレポートしている話だが、ドル/円が大底をつけるには幾つかの必須条件があり、そのなかに「必ず2番底、もしくは3番底をつける」ー という経験則がある。

前段で指摘したような、「年内100円割れ」を達成するかどうかまではわからないものの、9日に示現したドル安値101.19円に接近する局面がどこで到来しても決して不思議はないだろう。

### << 「ドル高・円安」派 >>

対する「ドル高・円安」派の論拠のひとつは、先週レポートした「ボトムサイクル」の話。詳細はバックナンバー、先週のレポートを参照されたいが、もっとも大事な部分だけを抜き書きすれば「中期波動と短期波動において、9日安値101.19円はドルボトムとして非常にしっくりくる」ー ということになる。

また、これも先週レポートしているが、仮にドル安値101.19円を更新する局面があっても、原則としては月内もしくは来月。ズルズルと何ヵ月も、ドル安・円高傾向が続く公算はサイクル的に見て低いと考えられている。「すでに底入れ達成済み」、もしくは「底入れ間近」とサイクル的には言えそうだ。

一方、このところ聞くことはほとんどなくなってしまったが、当初は今回の新型コロナウイルスと比較されることの多かった2003年「SARS(重症急性呼吸器症候群)」の際の情勢をいま一度振り返ると、まずは

